

「ノープリウスを探せ！」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

小学校の校庭にあるライオン池(壁泉)のビオトープには、メダカ、ヤゴ、カエルなど、さまざまな生き物が住んでいる。それらの餌になっているのが、同じ池にいる多くのプランクトンだ。



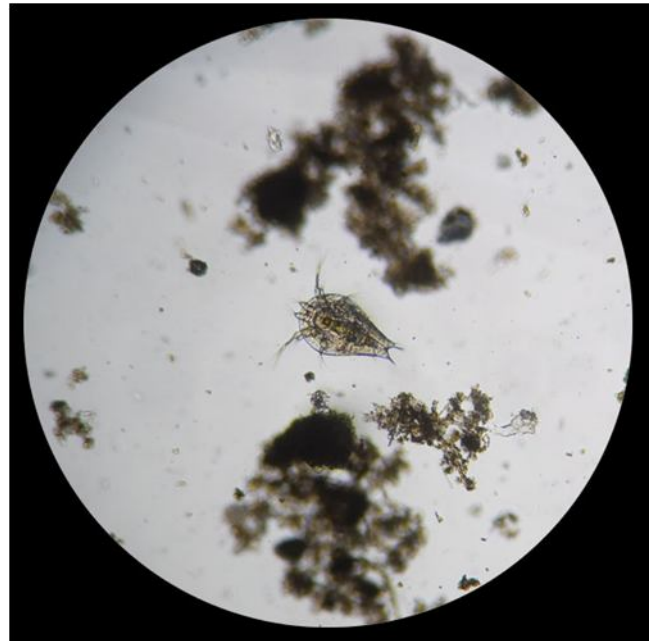
よく見つかるのがケンミジンコである。池底の泥の中に潜んでいる。ケンミジンコは脱皮を10回以上繰り返して、変態しながら成長する。



写真は「コペポディト幼生」まだ体制が不完全で、メスでも卵を持たない。横から見ると、エビのように見えるのが特徴である。

更に小さいものが「ノープリウス幼生」である。ノープリウスというのは、ケンミジンコに限らず、海水性のプランクトン(エビやカニの幼生)にも使われる用語で、私はケンミジンコの成長の特徴を説明し、「みんなでノープリウスを探そう」と呼びかけた。

成体やコペポディトに比べると、ノープリウスはずっと小さく、動きもずっと素早いので、なかなか見つからない。見つけても、顕微鏡視野の中央にじっとしてくれない。しかし、一人一台の顕微鏡で、クラス全体で観察すると、必ず見つかるものだ。



これがケンミジンコの「ノープリウス幼生」(×40)である。できるだけ視野の中央に置くには、いくつかの工夫が必要である。スライドはフラットのほうが良い。カバーガラスとのすき間の水分もできるだけ吸い取ってしまったほうが、泳ぎが鈍くなる。水中のゴミのようなもののすき間に追いつくと、じっと止まってくれる。すぐに顕微鏡前に行列ができる。



これが100倍で観察したノープリウス幼生だ。眼点の一つというのが特徴だ。どんなに狭いすき間に追い詰めても、足をジタバタさせてよく動く。子どもたちには「カワイイ〜!」と、大人気だった。